

ガセネタが世界を走る

自己批判、誤訳、捏造

川口幸宏

— 煩わしくはありますが、脚注も是非お読みくださいますように。

まずは自己批判から

冒頭から剣呑な物言いになるが、自身に対する厳しい批判も含めていることがこの表題の根っこにある。それというのは、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践—』（全4巻、日本図書センター、2004年）は、もし再版をするのなら大幅な（あるいは全面）改訂をすべきだということである。叶うならば絶版にすべきだとさえ考えている。それほどに問題が多く含まれている。何をお前言っているのか、と非難されたとしたら、少なくともぼくが執筆等にかかわった部分については「墨塗り」にすべきだと自己主張をする。

ぼくがかかわった部分とは—

○瀬田康司名の各巻グラビア

○第3巻所収の雑文「特別寄稿 教育への目線—Civilisation か Culture か— 現代学校創造のためにセガンを学ぶ」

○第4巻 ぼくの署名が入っている箇所すべて つまり—

セガン・関係年譜

セガン著作・関係文献目録

④ドイツ

セガンへの追悼と報道記事

2)セガンの告別式(1880年10月31日)

①息子、E. C. セガン博士による挨拶

②友人代表の追悼の辞

(1)L. P. ブロケット博士(ニューヨーク州ブルックリン)

(2)マリソン・シムス博士(ニューヨーク)

3)セガンの追悼と評価 (『ニューヨーク・タイムズ』紙)

セガンの教具

ずいぶんと出しゃばったものだ和我ながら呆れる。何故に「墨塗り」にする気持ちなのか。それは、一つにまったくの門外漢の口出しであったということ、二つに「セガン」理解を支えるための基礎教養が欠落していたということ。確かにパリ・コムニオンを少々学んではいたけれど、それで得た教養ではとても太刀打ちできないのだ。三つにやはり語学力のあまりにも貧困さであったということ、とりわけ 19 世紀前半のフランス筆記体文字（公文書）とは初めて〈長文〉と向かい合ったのであり、フランス人の知人 R 氏に助力を乞うたけれど、その彼も筆記体を十分には理解できなかったようだ。結果的に彼の助力のいくつかの部分においてさえ誤認・欠落があるのだから。四つに「セガン」を読み解く学力の欠如ということ、である。すべて清水寛氏からの依頼を受けてなしたことであるゆえ、五つに、依頼を断る勇気を持たなかったという貧しい人間性の問題もあげられよう。

しかし、同時進行的につぶやいていたのは、「これは自分がやるべきではない、能力に余る、セガン研究者やフランス文化史研究者がやるべき課題だ。」ということであった。60 歳になりなんとする時から始めて、独学でしか勉強してこなかった — たとえば語学学校に行く、とかそういう問題も含まれるが、共同研究の場で「たたかれる」ということさえしなかった — フランス近代教育史力、フランス語読解力なのだから。もちろん障害児教育、医学の分野についてはまったく無知無識の状態。無謀にもほどがある。依頼者清水氏は期待に充ち満ちていたのだろうが、こちらがそれはお門違いです、と言えよよかっただけのことなのに。

結果的に、成したことに残された痕跡は、誤訳、誤解などなど、とても「研究成果」とは言えない作品ばかりである。この書物と清水寛氏に日本社会事業史学会から文献資料賞が授

与されたことをお祝いする会を開いた席(2005年7月2日)で、尊敬する同窓の先輩古沢常雄法政大学名誉教授が、ぼくに、「川口君、誤訳が多いねえ。」とソフトな語り口だけれども厳しく語りかけてきた。ドキッとした。一番恐れていたことだからだ。

自らが自らに招いた「屈辱」感。へらへら笑って対応していても、ぼくの内面はぼくによって表現されない限り、誰にも理解されることがない。だから、ぼくは、「セガン」という「公の場」から身を引くことも可能だった。清水寛氏が、「2012年のセガン生誕200年祭の国際シンポジウムに参加し、できればフランス語で発表しましょう、そのためにセガン研究会を立ち上げましょう。」と言い、実際に、事務局をぼくの研究室に置き、研究会を組織し、会報『セガン研究報』の発行をするように指示したその2ヶ月後の2005年秋口には、当の本人が、「ぼくはセガンどころではない、近藤益雄に命をかけています。」と、ぼくに「宣告」したように¹。そうしても誰も異論は挟まない。

しかし、「屈辱」感は自身に常に向かい、襲い来る。これを晴らさないことには、ぼく自身の人生末期を落ち着いて送ることができないのではないか。そういう「恐怖感」のようなものが生まれ始めた。

それから逃れたい。ではどうやって。障害児教育の専門的発言はできっこないけれども、埼玉大学在職中からこだわってきた「自立」(近代的自我の確立)の問題として、「セガン」を素材にして考え深めたい、との思いを定めた。2005年7月2日の「祝う会」でのぼくの基

¹ 「日本セガン研究会」を立ち上げる際の清水氏とぼくとの協議内容の特徴だけは記録に残しておかねばなるまい。

研究会の立ち上げ提案は清水氏からなされた。ぼくからではない。そして清水氏は民間運動団体としての性格を前面に打ち出し、集団指導・運営体制という組織に強くこだわった。ぼくはアカディミズムを基本性格とすべきだと主張した。

しかし清水氏は「アカディミズム団体だと、①誰が会員になるやもしれず組織内で恐ろしいほどの対立・抗争を生む可能性が強い、事実自分自身がそういう嵐の中で攻撃され続けてきた、②普通のおばちゃんにセガンと知的障害教育とに興味関心を持ってもらい、「セガン」を広めていきたい。」と強調され、規約原案を作成された。

これは2003年7月2日の「清水寛先生の『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』の出版と日本社会事業史学会文献資料賞受賞とお祝いする会」に、清水寛氏から参加者に向けて発議される内容なのだから、ぼくはぼく自身に強くこだわることは避けなければならないのは当然である。

「日本セガン研究会」はこうして出発したが、そのわずか2か月後、彼自身はセガン研究から撤退する宣言をなされたのだ。あまつさえ、「近藤益雄研究」への強いかわりを求められ、有無を言わず、従属させられた。いわゆる研究世界の奴隷制度そのものに絡み取られていった。

調報告のようなもの「エドゥアール・セガンについて分かりつつあること」(草稿題は「セガンの秘密」²)を準備するプロセスで、清水寛氏が、「あなたはセガンをネガティブに見ている」と、ぼくを厳しく非難した課題を捨てずに発展させたいという、ある意味「悲壮な決意」を固めて、セガンにかかわる文献を読み進めていったのであった³。

以下は、こうした問題意識から捉えた「既成の学術研究・セガン」の致命的な問題性、活字化されない問題性を皮切りにした一指摘である。

偽情報(捏造)のいくつか

2003年11月3日、職場の研究室で、ぼくは素っ頓狂な声を挙げた。

その頃、研究室によく顔を出していた学生が、さも心配そうに、「先生、どうしたんですか。」と声を掛けてきた。

「古本屋に頼んでいたセガンの翻訳書が今日届いたんだけどね、それには、ぼくは、違う、あり得ない、と考えていたことが、逆に、そうなんだ、事実なんだ、と思わされるのが書かれているんだよ。」

「それは困りましたね。」

ことの次第は次のようである。

—エドゥアール・セガンは、フランス時代に医学博士の医師でありながら、白痴教育を開拓した。一人の白痴の子どもの教育に成功し、その業績が高く評価され、フランス政府は彼を、二つの大きな精神病院に招聘した。一つは「サルペトリエール院」であり、あと一

² 本稿末尾に添付した。

³ 2004年5月4日付で清水寛氏に宛てたファックス手紙の一節を紹介しておきたい。

「セガンをどのように描くかについてに関わることですが、『セガン』(清水寛編著書の略称)以降の現地調査などで大きく浮かび上がってきたことは、セガンの『人間性』でした。あの未踏の実践開拓をしたエネルギーの元はどこから来ているのか、それが私の強い問題関心であり、それが家族関係であると、今私は捉えています。コンプレックスこそが彼のエネルギーの源であるということです。それを正面からとらえ直していかないと、新たなセガン像が出てこないのではないかとさえ思っております。パリの住所を点々をしているのも、私にはよく理解できます。家族に対して面従腹背であったことも、よく理解できます。」

つは「ビセートル院」である。ー

これが、ぼくが「セガン研究」の世界を垣間見た 2003 年当時の我が国の定説だった。すべてが初めて耳にすることであったので、そのまま受け入れてものごとを考えていけばいいものを、清水寛氏から、氏が執筆しようとしているセガン研究への協力、とりわけフランス時代についての資料検索等の協力を依頼されたため⁴、入手資料をファックスでお届けしていた。そうした作業の中で、「サルペトリエール院はあり得ないのではないか」と思うようになっていた。

というのも、セガンが教えた子ども集団というのは 20 歳未満の男子であったと、多くの資料に書かれている。ところが、その時代「サルペトリエール院」は女子専用施設であり、制度上の名称は「女子養老院」とされていた。フランス革命後のフランス社会は頑なに男女別施設にこだわっていたことの一つの「証言」となる。「サルペトリエール院」というのは日本独自の呼び方で、現在は一大総合病院(現在名:^{オピタル ド ラ ピティエー}l'Hôpital de la Pitié-Salpêtrière)、セガンの時代は総合的な救済施設ー女子養老院、産院、浮浪者収容施設、精神病院などで「ラ・サルペトリエール救済院」(訳者によっては「サルペトリエール救貧院」「サルペトリエール施療院」ともされる)と通称されていた(^{オスピス ド ラ サルペトリエール}l'Hospice de la Salpêtrière)⁵。そういうことも学習した。ついでにいうと、「ビセートル院」は男子専用施設⁶。

「清水寛先生と行く、『エミール』・セガン・21 世紀平和への旅」の空でも、この問題について、かなり激しく議論をした。「アメリカのセガン研究で博士号を取った人がそう言って

⁴ 「ぼくはインターネットを使えないので、川口さん、チョイチョイとやってくれませんか。簡単なんでしょ？」という申し出で、「チョイチョイ」、「簡単」という言葉に腹立ちはしたが、とにかく、ネット検索、データのプリントアウト提供を始めた。が、じつは清水氏、フランス語が読めない、という。えっ! 「40 年間、セガンを研究し続けた」のじゃなかったの? 「至急、訳出してください。」その始まりが 2003 年 11 月以降。それ以来、清水氏は「言葉がいてねいで優しい口調の絶対者ご主人さま」となり、ぼくは「手足頭金^金すべて自前持ちの従順な下僕」となった次第。これをしたためている現在(2016 年 7 月 11 日)、ぼく自身に反吐が出るほどの嫌悪感を覚えている。

⁵ フランスのあらゆる文献では、略称として、“la Salpêtrière” が用いられているように、「ラ・サルペトリエール」というのが固有名詞にあたる。ぼくは「サルペトリエール院」という用語を自己概念として使用していない。

⁶ 「ラ・サルペトリエール」と同じように、現在名:l'Hôpital de Bicêtre、歴史名:l'Hospice de Bicêtre。

いる 7のに、川口さんは、それでも間違いだというのですか？」に始まる人の禪を借りて相撲を取る論理展開で自説を曲げようとなさらない。ぼくはぼくで、^{水戸のご老公の印籠}博士論文という^{これが目に入らぬか!}権威提示に動じるはずはなく、フランス社会の文化的伝統を 2000 年以来肌身を通じて感じているので、譲るはずはない。そして清水氏はついにこう言った、「白痴なんだから、男女別にこだわる必要はない」。一瞬、え？聞き間違い？・・・果たしてそれはどうか。性的な問題は根源的な問題であり、「こだわり」の歴史の連続であったのではないか。イタールがヴィクトールに思春期兆候が出てきたため実践を取りやめた？と解説される問題なのではないのか？

「とにかく、川口さんの自説を実証しなさい。」と吐き捨てるように言った。

その後、頼まれたから資料を検索するというばかりではなく、自分から求めて、セガンが「白痴」の子どもたち 10 人（当初は 11 人）の集団教育に「成功」した場がどこであったのかを、確定する作業を頻繁にするようになった。いかんせん、インターネットしかその手段はない。それでも、入手しうるフランス語資料でセガンが実践を行った場は、^{ホスピス ドゥ}l'Hospice des ^{アンキュラブル}Incurables という施設であったことが判明した。訳すれば「不治者救済院」となる 8。

ただ、公文書やセガンの著作で確認した情報ではないので、そのための手段として、その施設での実践記録 9 が訳出掲載されている翻訳書 10 の入手をしたというわけだ。

翻訳書冒頭部がくだんの実践記録である。その扉ページに「不治者施療院理事会への報告＝サルペトリエール院における実践の最初の三ヶ月間のまとめ（一八四二年）」と明記されているのではないか！やっばりか。その他にあたった研究書・翻訳書でも、たとえば松矢勝宏

7 Mabel E. Talbot: ÉDOUARD SEGUIN – A Study of an Educational Approach to the Treatment of Mentally Defective Children, Bureau of publications, Teachers College, Columbia University. New York 1964. 翻訳書『エドゥアール・セガンの教育学』（中野善達・清水知子訳、福村出版、1994 年）

8 至急丸善を通して入手した前記(注 4 の文献)タルボットの博士論文に、この名の英語名として、the Hopital for Incurables として登場し、それは 1841 年から 42 年の実践の場とされている。これは本文での記述だが、「preface」では the *Salpêtrière* と明記されているのだ。

9 1842 年著書『精神遅滞児と白痴児教育の理論と実践－不治者救済院の白痴の青少年に対する授業』（Théorie et pratique de l'éducation des enfants arriérés et idiots. Leçons aux jeunes idiots de l'hospice des Incurables. Paris. Chez Germer Ballière. 1842.）

10 中野善達訳『エドゥアール・セガン 知的障害児の教育』福村書店、1980 年。

氏の『大井清吉・松矢勝宏訳『イタル・セガン教育論』(世界教育学選集 100、明治図書)』解説論文他において、「サルペトリエールの不治永患者院」とか「サルペトリエール院の別院」とかの表記が見られる。また、津曲裕次氏は、『『白痴の使徒』エドワード・セガンの生涯』(奈良教育大学研究紀要、1969年)において、「サルペトリエールの精神病院 the hospice des Incurables」との表記をしている。このように、セガン研究にかかわる我が国の著作・翻訳書から「サルペトリエール」の文字のないものを見つけることは困難であった。

でもでも・・・先ほどのセガンの実践記録の翻訳書に話は戻るが、本当に原文にそう書かれているのだろうか、ひょっとして、訳者が書き加えたのじゃないか。

グジグジ考えても埒があかない。中野善達氏に直接問い合わせをしようかとも思ったが、躊躇した。「セガン」のイロハも知らないくせに何を言っているのか、とお叱りを受けるのではないかと怖じ気ついたのだ。この怖じ気は、他の人の、他の問題で被った、嘲笑に近い扱いをされた¹¹ことで、あながち間違いではないと思う。そうとなれば、セガンの原著を入手するしか、実証方法はない。しかし、1842年の原著は復刻も再刊もされていない。フランス国立図書館の蔵書目録にもない。・・・・・・

こうして、ぼくの、まったく手作りのセガン研究いかにがいかに錨を揚げた次第なのだ。

すでに、2003年8月にはパリ・ジベール書店で、チュエイエ、ペリシエ両者編集になる『子どもの精神医学の開拓者 エドゥアール・セガン(1812-1880)』(Thuillier et Pélicier, Un pionnier de la psychiatrie de l'enfant Edouard Séguin(1812-1880))という史料集が入手できた。これはセガンのフランス時代を史料的に明らかにするもので、グジグジするぼくの海路の有力な道しるべとなるはずであったが、読むこむという行為のために腰を上げるには、当時のぼくのフランス語力では、重すぎた。しかし、その年の11月に入って清水寛氏から、掲載史料の编者による解説文だけでも訳出してほしい、との緊急の依頼があった。ことはついでにと、セガンの教育実践と la Salpetorièr とをつなぐ史料を同書で丹念に探したが、見当たらない。l'Hospice des Incurables は容易に見いだせる。このことから類推されるの

¹¹ 研究内容に対する批判的質問状に添えた自己紹介のごく一部に対して、「フランス語は独学ですって？私は大学の教養課程で学びましたよ。」とだけの「お便り」が寄せられた。

は、フランスではセガンと「サルペトリエール院」とを直接つないで語られてきてはいない、ということだ。

この時点でぼくは、「セガンはサルペトリエールでは実践していない」と確信し、確定情報として清水氏に届けた。氏は「その確定は保留する」との返事、完全否定からは一步離脱はしたということだ。

前述のセガン史料集の中に、セガンが、自力創設をした学校の入っているアパートの大家とその管理人を相手にして損害賠償を求める裁判を起こしたことを報じる、1841年2月4日付の司法新聞『ガゼット』紙の記事が載せられていた。裁判自体は、セガンが悪しき風評を立てられたため、彼が自力で興した知的障害の子どものための教育施設への入学の問い合わせ行動を妨害され、それ故セガンは損失を被った、というものである。ぼくが目にしたのは、その記事の本筋もそうだが、冒頭部に、「二つの不治者救済院に白痴の若者たちの教師として雇用された」という内容が綴られていたことであつた。「二つの不治者救済院¹²⁾」？それを解く鍵は、1840年11月16日の『ル・モニトゥール』紙に次の記事が掲載されていた。

「この11月4日の救済院総評議会の決定により、パリ、ピガール通り6の、白痴児、痴愚による唾などの教育施設長エドゥアール・セガン氏は、白痴の青少年の教師身分で、セヴル通りとフォブール・サン＝マルタンの救済院に雇われる。」

インターネット検索を繰り返した。結果データとして、男子用の不治者救済院と女子用の不治者救済院とがあり、男子用のそれはセヌ川右岸のフォブール・サン＝マルタンに、女子用のそれはセヌ川左岸のセヴル通りにあつた、との情報を得た。ひょっとして、男子用のそれが「ビセートル院」であり、女子用のそれが「サルペトリエール院」かとも思えたが、パリ・コミュニケーション研究で買い込んであつた1850年以前のパリ地図数冊数帖でそれぞれを確かめたところ、それぞれはまったく異なるのだ。従つて、中野善達訳『エドゥアール・セガン 知的障害児の教育』の冒頭に書かれていた「サルペトリエールの不治永患者院における教育実践」には、「サルペトリエール」という偽情報が書き加えられていることが強く推定された。

¹²⁾ その後知り得た公文書には、しばしば、les Hospices des Incurables という表現が登場する。これは「不治者救済院」の複数表現。いくつあるかは直接的には書いていない。

セガンは男子の子どもを指導した、という情報に従えば、彼はフォブール・サン＝マルタンの不治者救済院で実践したはずである。それを何とか、セガンの口から語らせる方法はないものか。原典が入手できていない以上、中野善達氏の訳文をつらつら読むしかない。

訳文としてはなはだ落ち着かない悪文の日本語なのだが、主旨として、セガンは男女の不治者救済院に呼ばれたけれども女子の方は携わず男子のみでの実践であったという旨の記述がある！セガンが1841年と42年に実践した場合は、旧パリ2区、フォブール・サンマルタン男子不治者救済院、それ以外を考えるべきではない。

この考えに絶対の確信を持ち、清水氏に報告、同時に「ゲラを拝読していて大いに気になっているのですが、清水先生編著の『セガン 知的障害教育・福祉の源流－研究と大学教育の実践』（4巻本）に収録される藤井力夫先生のご論文に、この旨が明記されておりますよ。」とも言葉を添えて。「藤井さんのそんな重大な問題提起を見逃していました！」と応じつつ、氏は同書のグラビアページに、「男子不治者救済院」を写真で入れたいので、是非写真を撮ってもらいたいとの希望が出された。それでぼくは、パリ在住の、学習院大学仏文科卒業生であり中央大学教育学研究科に在籍して中野光先生の薫陶を得ていた瓦林亜希子氏に取材をお願いした。2004年3月中旬のことである。瓦林氏は、ぼくとメールで情報を交換しながら該当地域を探索し、ついに、東駅前の、現行パリ地図には公園内の施設としか分からない、現在の「レコレ国際交流センター」が入っている建築物が、18世紀のレコレ修道院建築物を利用したものであり、フランス革命によって養老院に転換され、1802年からその世紀の半ばまでは「男子不治者救済院」であったことを突き止め、グラビアに収める写真を撮り送ってくれた。セガン研究史上、初めての写真情報であり、清水氏が非常に喜んだのはいうまでもない(自らを恥じる言葉は一切吐かれなかったのだが)。

同施設についてその後も文献等によって調査を進めたが、現在の建築物は、「男子不治者救済院」の一部でしかないようである。かつてのその全容を描いた銅版画の存在を知ったのは、2013年のこと。拙著『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミューン』（幻戯書房、2014年）に収載した。銅版画に描かれた建築物の正面（ファサード）の様子はそのまま現在も残っている。

それにしても、なぜ、男子不治者救済院が「サルペトリエール院」だと記述されたのか。そのソース元は何なのか。藤井論文に考察されていることがらだが、ぼく自身の資料読み取り能力を確認する意味でも、その問題を本格的に考えるようになったのは、2005年2月25日、セヴル通りにある「ネッカー子ども病院」(旧「病弱児施療院」)を訪ねて以降のことになる。

先に触れた中野善達氏が、セガンが最初に教えた白痴の子どもは「病弱児施療院」に収容されていた子どもであった、と書いていた¹³。訪問の主目的は中野説の確証を得るためであった。これは、清水寛氏にぼくがひ弱な大学院生であった時代(ずっとひ弱だよなー)に「先人が歩いた道を重ね歩いて後にしかるべき研究が始まるのです。」と厳しく教えられたことを忠実に実施したのであった。

しかし、同病院ならびに関係機関等に関わる公文書の収集・保存・保守管理・閲覧提供を担っている^{アーベール・アッシュベール} AP・HP 古文書館(パリ4区)に保存されている、入退院、死亡者名簿には該当児童名はなかった。脱線的に、後日、医療史書籍で、セガンと関わりのあった病弱児施療院の院長ゲルサンがパリ市内にクリニックを開いていたことの情報に接したぼくは、そのクリニック—裕福な家庭を相手に開業。精神医学者が開設した、精神療法を行う場としての医師と患者との共同生活空間とは異なって、いわゆる個人開業病院—が、セガンが居住していた近在であったこと(あまつさえ、セガンが、当時パリを襲っていたインフルエンザに罹患し重篤状態であったこと)を知り、病弱児施療院の名簿に該当児童名がなかったことと併せて、中野説を完全否定で捉えるようになった。

中野氏は、推定事項を断定事項に書き換える悪癖がおりだということは、他の事柄についても明確になっている。後に続く者は氏の断定情報を手がかりとして研究を進めるのだから、研究成果もいびつにならざるを得ないのだ。ぼくが清水氏に、2003年6月頃、「セガンがサルペトリエールで子どもを教えたというのには、どのような根拠があるのですか？」と尋ねた時、氏は、先に挙げた中野訳本をためらうことなく提示したのほどなのだ。

これで疑問が解消されたわけではないことはもちろんである。やはりソース元を特定しな

¹³ 中野善達「イタルの『アヴェロン野生児』の教育実践とセガン」、清水寛編著前掲書、第1巻。

ければならない。

片っ端からセガンを直接対象としているフランス語文献を、インターネットをも利用して、検索しはじめた。フランス国立図書館のデータベースサービスを利活用する。しばしばセガン論で登場する D. M. ブルヌヴィル (Bourneville 1840-1909) については、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、セガンをフランス社会に「復活させた人」だと聞かされていたので、とくだんに注意を払って文献の検索にあたった。

ブルヌヴィルが、1889 年 7 月 12 日のフランス下院で行った緊急提案「上院で合意を得た、精神病者に関する 1838 年 6 月 30 日法改正に向けて、法案作成の任を持つ委員会の名でなされた報告」を読んでいるうちに、このブルヌヴィルのセガン論が、後のセガン研究のストーリーづくりに大きく貢献していることが分かった。たとえばそれは、松矢勝宏氏の研究「エドアール・O・セガン—知的障害児教育の父、人類の教育を求めて」(1981 年。セガン 1846 年著書翻訳解説) や津曲裕次氏の初期論文などに、色濃く反映されている。

それらについて語るのがここでの目的ではないが、ブルヌヴィルは、同提案で、セガンがセヴル通りの不治者救済院で教育実践を行った、と明言しているではないか！ 彼は 20 世紀前半期のフランスの知的障害児の医療教育的政策や施設づくりの立役者であった。彼がそう書いているから、誰も疑うことがなかったのだと推測できる。しかし、と思う。そういう人でありながら、男子施設と女子施設との判別をどうしてしなかったのか、と。ブルヌヴィルが活躍し始めたころはフォブール・サン＝マルタン男子不治者救済院は軍事病院に組織転換されてしまっていたことが、ブルヌヴィルの誤認を生んでしまったのだろうか、とは推測できるのだが…。

さて、アメリカのタルボットがなぜ、ラ・サルペトリエールでセガンが実践したとみなしたのか。セヴル通りの「不治者救済院」が女子施設であったことを知ったので、同種の女子施設であるサルペトリエールと同一視したという推論が成り立つ。その推論の根拠は次のようである。当時、ヨーロッパ各国で知的障害者のための医療教育施設の整備が進んでいたが、その一環で、一人の関係者(ベルギーのクロムランク博士)による視察がセガンの「男子不治者救済院」での実践に対してなされている(その旨はセガンの『1842 年第二著作』の冒頭に

綴られている)。その報告書にタイトルされているのが「ビセートルの出先機関」であった¹⁴。つまり、関係者外では、男子不治療者救済院はビセートルの支部門であるという理解がされていたのだ。女子不治療者救済院に関する同様の証言的記述はまだ探し得ないが、タルボットは類推したに違いないだろう。あとは無検証コピーをし続けたというわけだ。しかし、1840年代の救済院・施療院の統廃合が進められている中で、男子不治療者救済院に収容されていた者たちが、ビセートルに移管されたという史実はあるが、法制度的に組織一体であった史実はない。

元凶？は、まず、ベルギーのクロムランク博士の視察報告、続いてフランスの児童医学と知的障害の医療教育の権威者ブルヌヴィル、そしてアメリカ・タルボットのセガン研究一博士論文であった。ブルヌヴィル以降のフランスでのセガン研究がタルボットと同じ誤りをしてはいないというのも、じつに面白い現象だと、ぼくは思うのである。しかし、ブルヌヴィルの論に忠実なセヴル通りの不治療者救済院での実践説を採り入れている叙述は見受けられるはず。2012年10月末に開催されたエドゥアール・セガン生誕200年祭を案内する主催者によるセガンの略伝の中でさえ、見事に、セガンはセヴル通りの女子不治療者救済院で白痴教育に取り組んだとされているのである。

我が国のセガン研究の開拓者のお一人である津曲裕次氏は、氏の近年の論稿「セガンとその教具について」（モンテッソーリ研究第48号、2010年、日本モンテッソーリ協会）において、「サルペトリエール院」説を引き継いでいる。氏の論稿には既出の藤井論文やぼくの『^{イデイオ}知的障害教育の開拓者セガンー孤立から社会化への探究』（新日本出版社、2010年）を先行研究としている痕跡は残されているのだが、一切クリティーク無しである。ぼくや藤井氏の説と大きく矛盾する津曲説であるにもかかわらず、氏は「この論文によって、セガンの生涯と業績についてはほぼ明らかにすることができた」と断言する。論証無しの自説を本文に綴り、その内容を実質批判する諸文献名を注記するだけなのだから、ぼくから書簡で「他の研究成果・到達を無視している」と揶揄されるのは当然のこと。その揶揄に対して「無視していません」と反駁召されても、論理上、何ら説得性はないのだ。

¹⁴ 前出のデュエイエら編のセガン史料集の解説による。

重大な誤訳が史実を曲げてしまう

ところで、2004年初頭、清水寛氏から一人の研究者の紹介を受けた。星野常夫文教大学教授である。清水氏から星野氏はブルヌヴィルの研究者だと紹介を受けた。星野氏と面識を得たのはこの時が初めてで、その後ごく一時期、清水氏の前掲大編著刊行に向けて、ともに実務奮闘した仲である。清水氏から聞かされた笑い話のようなことであるが、清水氏が星野氏にぼくのことを情報提供した際の星野氏のリアクションは「その人、誰？」であったような。障害児教育の分野、フランス教育史の分野、そして教育学の分野でも、ぼくの名前を聞いたことがない、もちろん業績など知るわけがない、そういう星野氏の胸の内は、とてもよく分かる。

その星野氏、セガンについて研究論文で言及しておられる。その中の一本に、セガンは前日の会議に欠勤したため馘首されたという生史料を発掘した、という注目すべき記述があった¹⁵。清水氏編著書にも収載されたこの論文の重大さを理解したのは、2006年のことである。

当該論文の中で、氏は、1994年の春、「セガンのビセートル院『辞職』に関する重要な史料を見つけることができ、いままで不明であったいくつかの事項を確認した。」と報告する。それらの事項の一つに、セガンが「ビセートルを辞めた理由は、自ら辞職したのではなく、罷免であった。」としている。確かにこの事実の発掘は、それまでの「セガン神話」の結末をひっくり返すほど、重要なことがらである。

さらに氏は指摘する、セガンは「前日の会議に欠勤したため」馘首されたのだ、と。星野氏もこれには「あまりにも唐突すぎる」と大きく首を傾げる記述をしているが、「セガンは(1843年)10月には、19回も授業を欠席している」との記録¹⁶をつけ合わせて、「前日の

¹⁵ 星野常夫「フランス19世紀後半の知能遅滞児教育の展開」(大井先生退官記念論文集刊行委員会編集『障害児教育の探求』田研出版、平成7年)

¹⁶ 「授業を欠席」というのはセガンがビセートルの「学校」で子どもたちを教えることを休んだことを意味する。ぼくの調査では、ビセートルの管理者マロンは、「セガンは授業を休んでいる」と言いつつ、同時に「白痴の子だけに授業をしている」とも綴っている。このことは重要な意味を持つのではないか。癲癇てんかんの子どもには教育はできないとしたセガンの実際行動だと理解できよう。だから、我が

会議欠勤による減首」の整合性を求めている。

そういえば、清水氏から、セガン研究への案内をいただいた折に、「セガンは会議に欠勤をしたためにピセートル院をクビになったそうです。」との情報が提示されたのだった。そんなバカなという思いと、フランス社会ならあり得るかもという思いとが交錯したものである。

このように、星野氏の研究成果は、間違いなく我が国のセガン研究に影響を与え、一つの歴史像を創りあげていくはずである。ぼくの思いの交錯の一方の「そんなバカな」は打ち消さざるを得ないではないか。

さて、星野氏が根拠とするところは、「ピセートル院退職者の原簿」という史料にある。その中に「今月 20 日の会議を休んだことにより罷免」という根拠が書かれている、とする。この限りでは、そうなんだ、と頷くしかない。

星野氏は原簿記載の原文を起こして原綴を論文に載せている。次の通りであった。

Révoqué par arrêté du conseil du 20 de ce mois.

これを目にした瞬間、また誤訳・誤認かい！と、あきれさえ感じた。セガン研究は、何故に、こうも誤訳・誤認がリードするのだ！

すでに綴ったが、AP-HP古文書館の存在を知ったのは 2005 年 2 月のこと。実際に古文書館を訪問することができたのは 2008 年 11 月のことであった。セガンの白痴実践についてどのような審議がなされ、どのような決定が為されたのかを調べるべき史料は「救済院総評議会 (le Conseil Général de hospices¹⁷)」の審議録。この存在は 2005 年 8 月に、救済院・施療院等に関する法令集を古書店から入手してあったので、知っていた。もちろん実史料は未見であった。

窓口の男性係官が懇切ていねいに応対してくれたおかげで、それまでまったく不明であったセガンの公的記録に残された像が浮かび上がってきた。セガンを「白痴の教師」として雇

国のセガン研究では「ストライキ」説が有効とされていることに対して、ぼくは慎重な記述が必要だと思っている。

¹⁷ 1801 年から 1848 年まで設置された。審議会メンバーは内務大臣によって任命され、11 人によって構成されていた。

用する契約¹⁸が切れるにあたって、1842年10月12日の救済院総評議会決定に示されていた「1843年度の任期切れの際、この教育者によって得られた結果について、総評議会に報告書を提出すること」の通り、再雇用をするかどうかの検証をして後、1843年12月20日、救済院総評議会の会議を経て、「セガン氏は白痴児の教育者の職務を解かれる」ことが決定された。星野氏が発掘したビセートルの「退職名簿」に記載されていた「*Révoqué par arrêté du conseil du 20 de ce mois.*」は、「「*「*今月20日の会議を休んだことにより罷免*」*」なのではない。par arrêté du conseilが完全なる誤読。arrêtéには「(裁判などの)判決」という意味があり、この時代、議会などの「決定」を示す語として使われていた。conseilは確かに「会議」の意味であるが、その会議が特定されていると理解できる。すなわち、セヌ県・パリ市全体の救済院・施療院・在宅救護に関して管理・運営する任を得ている総評議会のことである。人事権、予算権をも有している組織であり、総評議会に統括され管理下に置かれているビセートル救済院が、星野氏の理解のような、単独で人事を策定することはあり得ないのだ。

最後に、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』は、収録稿—セガンならびに周辺・関連研究—のほとんどが既発表論稿である。このことについては「編者清水寛」によって明示されていない。ぼくは編集の最終段階で参入しただけであり、この間の事情を斟酌する立場にはないが、一般読者の立場からすると、それぞれが署名入り論稿であるので最終的には執筆者に責任があるけれども、(本稿に示したのはほんのささやかな事例でしか無く)多くの問題点(論理矛盾、情報混濁等)が含まれているような「学術出版書」はそうあるものではない、と思わされることだろう。編集者の「立ち位置」はどこにある? 「目次」(内容構成)によって「セガン研究の構造」を示し、その構造ごとに適し

¹⁸ 日本のセガン研究では「招待された」「招かれた」「招聘された」などと表現されてきた。その原因は、セガンは、白痴教育を開拓した偉大な人物であり、医学博士、かつ彼自身「無給」で教育に携わったと回想していたからだろうと、推測される。ぼくもまた、先行する研究者に影響され、原史料をきちんと読み取ることができず、著書『知的障害教育の先駆者セガン—孤立から社会化への探究』において、「招聘」「召致」との表現を用いている。史実は本稿本文記載の通り、「雇用」されたのである。このことは当時の医学系ジャーナリズムの報道でも明記されている。「招聘」か「雇用」か。日本のセガン研究者は誰一人として「雇用」という概念を用いていない。そこに見え隠れするのは「偉大なセガン」像に畏怖する障害児教育史そのものである。歴史として対象化できていないのだ。何せ「ローマ法王から白痴の使徒との称号を与えられた」ことが強調されるのだから。

た論文を配置する、そして、その論文は、清水氏が情報収集した論文を候補にして原作筆者に収載許諾をとる。もちろん新しく書き下ろしの依頼もしただろう。そういう編集作業の過程で各論文間に存在する矛盾、揺らぎがあるとしたら、編者はどのように対応すべきだったろうか。それへの姿勢(編集者注記などの添え書き)が見られない限り、少なくとも、単独の研究物としては検証性に乏しく、継承すべき科学性に乏しい、という厳しい批判を甘受するしかない。ぼくは清水氏に、「この大著は論稿集ですね。」と申し上げた。今思うと怖れをしら無い態度であった。

(追記)

2003年に「セガン」の世界に参入した時には、セガンを歴史的に位置づける段階は終わっていた。研究者それぞれのキャラクターにもよるが、ぼくが「セガン」に導かれた時には、セガンは「聖人」そのものとして捉えられていると感じさせられた。一点の瑕疵もない人物として描かなければならないという強迫性さえ感じた。確かに、「人間でないと言われた処遇を長く背負わされてきた白痴を、人間だとして捉え、教育をし、成功させた」(清水寛氏による。ただし、この清水氏の言が厳密な意味で史実に即してはいないだろうと思ひ始めたのは、2010年拙著刊行後であった。)傑物(の一人)なのだから。だからといって、虚報フセネタを創りあげ、あるいは解釈することが許されるはずはない。従って、先人に続いてぼくがなそうとしたことは、その「位置づけ」の過程で付与された諸情報のプラス・マイナスを史料に基づき操作し、実像に近いセガン像を形成することであった。

しかし、まだまだ力が及んでいないように思う。

(添付資料)

2005年7月2日「集い」における「報告」原稿案(いわゆる第一次稿)

セガンの秘密 — フランス時代

学習院大学 川口幸宏

本日の「セガン研究会」は、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流 — 研究と大学教育の

実践』(日本図書センター、2004年)の出版と、社会事業史学会の2005年度社会事業史文献資料賞受賞とを記念する「集い」であります。皆様にご参集くださいましたことに対し、呼びかけ人の一人として、厚く御礼申し上げます。ところで、この「集い」のための準備会で、セガンにまつわる新しい話をお前がやれ、とおおせつかりましたので、諸先輩をさておくというまことに僭越なことではありますが、少し時間をいただく無礼をお許しいただきたいと思ひます。

さて、報告させていただく表題は「セガンの秘密ーフランス時代」であります。1840年代の初めに、ウージェーヌ・シューという大衆小説作家が新聞連載小説『パリの秘密』を発表し、大変な人気を呼びました。この小説の中に、エドゥアール・セガンが教師の身分で知的障害児者教育に取り組んでいたビセートル救済院ーここは現在では一大総合病院となっておりますが、当時は男子養老院がメイン施設であり、男子のいわゆる精神病患者が隔離収容されている施設も併せ持っておりましたーが描かれており、セガンの実践の場である「学校」のことも描かれております。報告題はこの小説題名をもじっただけというなんとも芸のないことであることをあらかじめお断りいたしておきます。

時間の関係もございますので、「セガンの秘密」を3つに限ってお話させていただきます。

第一の「秘密」はセガン家の家系に関してであります。私がセガンについて学ばせていただいたのは、アメリカ、フランス、そしてわが国の諸先輩の研究やエッセイなどからでありました。それらを総合すると、エドゥアール・セガンという傑出した人物を生み出したセガン家というのは、フランス東南部のいわゆるブルゴーニュ地方のクラムシーという小さな町を舞台として代々医師を務めてきた名家である、ということになります。名家と聞いただけで私は拒否反応を起こす気質でありますので、セガンを学び始めた2003年当時にはセガン家の中には入りたくない、覗きたくないなあ、という気持ちになりました。しかし、今から30年余前、清水寛先生から「研究をするということは先人が歩いた道を重ね歩いたうえで、新たに道を開拓することだ」と厳しいご指導をいただいたことが思い起こされ、先人たちの研究の追跡調査に取り掛かったわけでもあります。

結論的に申し上げますと、エドゥアール・セガンが生誕したクラムシーという町には、父ジャック＝オネジム・セガンが、医師として、その地方の風土病との闘いを胸に秘めて入植したのであり、セガン家はクラムシーから北へ10キロほど離れたクーランジュというところで父祖から続いていた家系ではあるが、医師は一人としていなかった、ということになります。セガンの祖父がクラムシーで

はなくクーランジュで薪材商を営んでいたことは父親の出生届に明記されております。エドゥアール・セガンの母親はクラムシーから北へ45キロほど離れたオーセールというところの商人ユザンヌ家の出であり、名をマルグレットと言い、17歳のときジャック＝オネジムと結婚をしております。ジャック＝オネジム30歳のときでありました。なお、二人の結婚時には、セガンの父方の祖父母ともすでに亡くなっております。いずれにいたしましても、医学博士というのは、決して豊かではない地方では、フランス語で申しますと「コック・ド・ヴィラージュ」―「村一番の持て男」という意味であります―階層であったことは間違いありません。つまり、セガンは、クラムシーにおける特権的な階層にあった父親を持っていたわけであります。

さて、第2の「秘密」であります。セガンの学歴にかかわることです。フランスにおけるセガンの最新の研究では、彼は、オーセール、続いてパリのコレージュで学び、1832年にパリの法学部に学籍登録をした、とあります。そして、1841年8月の妹アントワネット＝コンスタンスの結婚に際しセガンは「弁護士」という肩書きで立会人を務めた、と言います。当時の弁護士資格から逆算いたしますと、法学士の資格を得、弁護士の実務訓練を終えるには最低6年間が必要です。この最低年数を1832年に加算いたしますと1838年に弁護士資格を得たという計算になります。しかし、この頃はずでにセガンは「白痴」教育の道に踏み出しております。私に素朴な、じつに単純な疑問がわいてきました。弁護士の実務訓練―これは弁護士事務所に所属して訓練を受けます―一期間中の身でどうして、ずぶの素人が世に名を売るほどの成果を生み出した実践ができたのだろうか、と。俺にできないことは他の人にできないに等しい、などと思っておごるつもりなど毛頭ありませんけれど、やはりきちんとした史資料を探し出さなければなるまい、と考えたわけであります。いわゆる学籍調査と称するものです。それにはさまざまなことがありましたが、やはり結論だけを申し上げることにいたします。

セガンは組織的な初等教育―地域の一般庶民の子弟対象―を受けておりません。

フランスはアカデミーという学区制がありますが、クラムシーはディジョン・アカデミー、オーセールはパリ・アカデミーに区分されておりました。セガンは、アカデミーを超えて、1825年、13歳の時、母親の出身地であるオーセールにある地方王立コレージュ―地域の有資産階級の子弟対象―に入學しております。続いて1828年にパリの王立コレージュであるサン＝ルイ校の数学特別進学クラスに進んでおります。当時コレージュには公立校と王立校とがあり、中でも王立校はエリートを育成して

おりました。サン＝ルイ校はとりわけ特権的な位置を占め、超エリート人材を育成し、グラン・ゼコールという特段に優れたエリート生徒たちが進学する学校でありました。彼は数学特別進学クラスで第4次席賞を受賞しておりますから際立って優秀な生徒であったことは間違いありません。グラン・ゼコールの一つエコール・ポリテクニクへ間違いなく進学できる成績を収めていたわけです。しかし、彼は、(1832年ではなく)1830年11月に法学部に学籍登録しております。この、いわば重大な針路変更こそ、セガンの「謎中の謎」と言えるものであります。

法学部入学が1830年であることが判明した以上、先ほどの加算計算、そして「白痴」教育の実践開始時期との間には矛盾が生じません。やれやれ、と言ったところではありますが、歴史は平気で裏切りをしてくれます。と申しますのは、「パリ法学部の学籍簿」に記載されているエドゥアール・セガンの項によりますと、法学部在籍は、非連続ではありますが、1841年9月24日まで続き、しかも修了をしております。つまりセガンは法学士という学位を取得していないわけであります。このことは妹の結婚に際する証明書に記載されたという「弁護士」という肩書きは詐称であることを意味しております。

平たく言うとうそつき、あるいは見栄っ張りというところになりますが、これをセガンの人格攻撃の材料として使うつもりは毛頭ありません。アメリカの社会学者のトレント jr がセガンは女性解放の主張者であったのに彼の文章の中には母親の名前も妻の名前も一切出てこない、と揶揄的に指摘しておりますが、私はトレント jr とは違った視点から、セガンのこの詐称を、その根源はセガンの家族関係あるいは家族認識にあるのではないかと考えております。セガンの最晩年の著書『教育に関する報告』に、王立特権コレージュの寄宿舎の様子を描く場面があります。まるで野性のサルを調教するとき抑圧状態、つまり人間らしい可能性を見せることができないネットワークが張られていると非常に激しい口調で述べておりますが、その最後にたいそう気になる文言を見ることができます。

「ヴァカンスの間に、これらのサルがその母、姉妹、知人に向けては、抑圧された性質を見せている……。しかしながら、家族の外では、彼らはこの関係に対して、否定的で反社会的な抵抗の精神を持ち込んでいるであろう。」とあります。家族の前ではまさに「いい子」であるが、その実質は家族から見れば否定的で反社会的な心を養っている、と言うわけです。あくまでも類推でしかありませんが、セガンは、その幼少期から家族の大きな期待を背負ってきた、そしてその期待を裏切ることなくパリの特権的な王立コレージュに進み、その果実を示してきた、しかしながら何らかの出会いによって、

その果実を熟させることなく落としてしまった、落とすはしたが、家族の期待に応えうるような新しい果実を実らせようとし続けた。いわば、かなり強い家族コンプレックスが彼の内心にはあったのではないかと思うわけであります。

彼の幼少年期の体験を彼自身が描いている文章を分析的に見ますと、「パパ」をモデルとした「手遊び」の真似び体験、家のすぐ近くの小麦市をじっと見つめるといういわば観察体験が気になります。体全身を動かすという身体体験が描かれていないのです。同世代の友人も登場しません。セガンの「白痴」教育実践では運動機能訓練が極めて重視されていることとあまりにも異なっています。セガンの幼少体験は、いわば静的な体験と言っていいいでしょう。このことと関係があるかどうか分かりませんが、関係がないのかもしれませんが、彼は 20 歳のときに徴兵検査を受けておりますが、そのときに「右手奇形にして身体虚弱」と診断されております。それでも召集兵くじを引き当てたのですから、軍事に従属することは可能なほどの体力はあったのでしょうか。余談ですが、彼は、どのような手段を使ったのかわかりませんが、召集兵となることはありませんでした。セガンを知る人—同時代人—が記すセガン像では、日常は静的であるが、不利益がかかるとなると攻撃的であったそうです。セガンの代表的な 1846 年の 700 ページ余に上る大著にはこうしたセガンの性格が如実に現れているようであります。あるいは、私がささやかながら読んだセガンの文章は、どこか詩的でありながら、いきなり饒舌になるなど、なかなか複雑であります。

さて、最後に第 3 の「秘密」の話をさせていただきます。

清水寛先生からセガンのフランス時代についてのさまざまな調査課題をいただきましたが、そのひとつが、パリでの居住地についてでありました。フランスの最新の研究を追跡調査していく中で、先ほど申しました学籍調査によって、サン＝ルイ王立コレッジ時代には寄宿制の私塾(パンシヨン)に身を寄せていたこと、法学部時代には 3 箇所に住居を定めていたことが判明しました。コレッジ時代のパンシヨンの住所は未調査です。法学部については、いつからいつまで居住していたかについては記載されておりませんが、推測あるいは他の資料を補うことによって多少のことはお話できるかと思えます。

rue Sainte Anne 24 (サン＝タンヌ通り 24)

rue D'enfer 7 (ダンフェル通り 7)

374 Saint Denis (サン＝ドゥニ 374)

学籍簿では最初の 2 事項に抹消線が引かれております。このことから上から順に住所を変えたことが推測されます。学籍登録資格(バカロレア)を都合 4 度行使していること、判明しているセガンの社会的活動などから類推して、1830 年がサン＝タンヌ通り 24、1833 年がダンフェル通り 7、1841 年がサン＝ドゥニ通り 374 であろうと思われます。また、公教育大臣が視学長官に宛てた手紙の中で「これはセガンが「白痴」教育の挙げた成果を公的に確かめる場を認めてほしいということ」を公教育大臣に直訴した受けたもので、セガンが 1840 年 1 月に私立学校を開設する端緒となる重要な文書であります。1839 年 9 月 6 日現在で 41 rue de la Chaussee d'Antin(ラ・ショッセー・ダントアン通り 41)にセガンが居住していることを示しております。また、セガンの要請を受けて「白痴」の子どものための教育施設の設置を認可する手紙が出されておりますが、そこには 1840 年 1 月 3 日現在でセガンが 6 rue Pigale(ピガール通り 6)に居住していることが示されています。その他には、1843 年にはパリ郊外の男子養老院(ビセートル救済院)で賄いつきの住み込みを命じられております。また、1847 年に 35 rue du Rocher(ロシェ通り 35)に住んでいたことが明らかにされております。

すべてというわけには参りませんが、私はこれらの居住地住所を訪ね歩きました。現在のパリに残っている地名(通り名)ばかりです。しかし、現在のパリとセガンがパリにいた時代とは大きく様相を変えております。ナポレオン III 世の時代、すなわち第 2 帝政時代にオスマンというセーヌ県知事によって近代都市パリへの大改造がなされました。ですから、地名が残っているからといってそれがそのままセガンの時代の姿を残している可能性のほうが少ないわけです。この、いわば時代の落差との出会いの話は、それはそれで面白いエピソードがありますが、時間も過ぎてしまいましたので割愛させていただき、話を閉じさせていただくことにいたします。ありがとうございました。

(2016 年 7 月 12 日現在の追記)

報告原稿「セガンの秘密」は、清水寛の「セガンがうそつきだというのですか!」という激高を呼んだ。「祝う会」の実行委員メンバーはそれぞれに、面白い、これで行きましょう、と賛意を示してくれたのだが、完全に廃棄し、新たな報告原稿「今、セガンについて、分かりつつあること」というタイトルの下で、自分の研究関心を表に出さない箇条書き内容にまとめた。「祝う会」では清水氏の長舌の

あおりを受けて、口頭での報告はできなかった。